

学位論文内容の要旨

論文提出者氏名	時 本 英 知
(論文題目) 知的障害者スポーツコーチにおける実践知獲得モデル作成の試み	
(内容の要旨) <p>知的障害者スポーツは、障害者スポーツの歴史的な背景が影響し、身体障害者スポーツと比べ遅れている。また、知的障害スポーツに関する研究は、スポーツにおいて最も研究されていない分野でもあり、コーチや指導に関する研究も少ないⁱⁱⁱ⁾。そのため、コーチの専門性が明確にされていない可能性が考えられる。数少ない知的障害者スポーツコーチに関する先行研究を確認すると、適切な指導を行えるコーチの重要性について述べられているものの、どのようにすれば適切な指導が行えるコーチとして熟達できるのかは、明らかにされていない。</p> <p>そこで本研究は、知的障害者スポーツコーチの専門性を紐解く手がかりを得るため、コーチ養成が捉える知的障害者スポーツコーチの専門性とコーチが捉える自らの専門性に関する意識を明らかにする。さらにそれらをふまえ、「知的障害者スポーツコーチの実践知の獲得モデル」を試作し、知的障害者スポーツコーチが熟達するための道すじを示すことを目的とした。</p> <p>この目的を達成するために以下の三つの手続きを踏んだ。</p> <p>手続①：「日本パラスポーツ協会」と「スペシャルオリンピックス日本」のコーチ養成における知的障害者に関する教育内容を整理し、コーチ養成では、知的障害者スポーツコーチの専門性をどのように位置付けているのかを明らかにする。</p> <p>手続②：当事者である知的障害者スポーツの指導を実践するコーチは、自らの専門性をどのように捉え、その意識をどのように変化させたのかを明らかにする。</p> <p>手続③：知的障害者スポーツコーチは、コーチ養成における研修や指導教本等による学習と、指導における実践経験の獲得を通して、どのような実践知をどのように獲得しているのかを明らかにし、そのモデル作成を試みる。</p> <p>その結果、各手続から以下の内容が明らかとなった。</p> <p>手続①では、現段階におけるコーチ養成の捉える専門性として、「個々のニーズに応じたサポート」「コミュニケーションスキル」「幅広い知的障害者を対象とする意識」「インクルーシブな活動を展開する意識」の4つを見出した。日本パラスポーツ協会は、多様な障害者のスポーツニーズに対応してきた背景がある。そのため、教育内容の特徴として、障害者スポーツ全体の振興を進める教育が行われ、障害者にとってのスポーツの意義や必要性をはじめとした理論的な内容が中心となっていた。一方で、スペシャルオリンピックス日本は、知的障害者へのスポーツの提供に専念してきた背景がある。そのため、教育内容の特徴として、知的障害の特性に応じた教育が行われており、知的障害者スポーツの指導に関する実践的な内容が中心となっていた。以上の結果をもとに4つの専門性を見出した。</p>	

手続②では、知的障害者スポーツコーチに対してインタビュー調査を実施した。その結果、知的障害者スポーツコーチが自らの専門性と捉えていたのは、〈参加者主体〉〈ライフステージを見通す〉〈個別化〉〈コミュニケーション〉の4つであった。コーチらは、知的障害者の現状や障害の特性、活動中の課題、活動の意味などについて実践を通して再確認し、それらに対応するなかで4つを専門性として確立していることを明らかにした。

以上の手続①と②の結果をもとに、手続③として「知的障害者スポーツコーチの実践知の獲得モデル」を試作した。その結果、知的障害者スポーツコーチは、研修や教本から学習する形式知と実践経験から獲得する暗黙知を蓄積させ、それらを円環させながら新たな知識を創造し蓄積させていることが分かった。また、その際、メタ認知スキルを働かせることで実践知を獲得していることが明らかとなった。

以上の結果から、知的障害者スポーツの実践知の獲得において、他の専門職と異なる部分を見出すことができた。その内容から、知的障害者スポーツコーチが熟達するための道すじについて次の通り考察した。

まず、知的障害者スポーツコーチは、他分野における教育から学習した内容を形式知の一部として転用し、実践知を獲得している。これは、専門職としての社会的な立場の違いが影響し、指導を進めるなかで形式知の不足が生じていることが一つの要因と考えられる。そのため、コーチが活用する他分野からの学習内容を精査し、知的障害者スポーツコーチが熟達するために必要となる形式知を明確にする重要性について指摘した。

次に、知的障害者スポーツコーチが活用する暗黙知の多くは、過去の知的障害者スポーツにおける指導経験を通し獲得したものが中心である。一方、健常児のコーチは、過去に自らが指導を受けた経験と、選手として熟達した経験を通して獲得した暗黙知を活用しながら、コーチとしての実践知を獲得しているⁱⁱⁱ⁾。また、軽度知的障害者の競技性の高い活動に対して指導するコーチは、「健常者と同じように指導する」という考え方も先行研究で示されている^{iv)}。そのため、同じ知的障害者に対する指導であっても、障害の程度や活動目的により、コーチが指導する際に重視する内容に違いがある可能性を指摘した。

以上の内容から、知的障害者スポーツコーチが熟達するためには、現状における課題をコーチ自らが把握し、対応していく必要がある。それには、指導の際の思考を文章や図表としていく作業が有効である。そして、本研究の「知的障害者スポーツコーチの実践知の獲得モデル」の作成も、この作業の一端を担っていることについて言及した。

-
- i) Campbell, N. J., & Stonebridge, J. (2020). Coaching athletes with intellectual disabilities: Same thing but different? *Sport Coaching with Diverse Populations*, 142-159. London, England: Routledge.
 - ii) MacDonald, D. J. Beck, K. Erickson, K., & Cote, J. (2016). Understanding Sources of Knowledge for Coaches of Athletes with Intellectual Disabilities. *Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities*, 29, 242-249.
 - iii) 原仲碧・中山雅雄・小井土正亮・桑原鉄平・森政憲・浅井武(2015)「育成年代サッカーコーチ(元Jリーガー)のコーチング実践知に関するライフストーリー研究」*コーチング学研究*, 28(2), 163-173.
 - iv) 田中敏裕(2022)「パラリンピックを目指す知的障がい者卓球コーチングに関する質的研究」*アダプテッド・スポーツ科学*, 20(1), 19-34.